

クツパ城でおやすみ

トードストール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつもの如く、ピーチ姫がクツパにさらわれた！

マリオはピーチ姫を助け出すために壮大な冒険を開始する！

……のはさておき。

「私の部屋が粗悪すぎるわ！ 環境改善を要求する！」

「ちようどいい枕があるじゃなくいい♪」

「これでやっとうつくり眠れるわ」

囚われのピーチ姫は安眠を目指して自らの環境改善に勤しむのであった。

目次

プロローグ	1
安眠枕を確保せよ!	4

プロローグ

「大変ですマリオさん！ 姫様がクツパにさらわれてしまいました！」

「なんだって!?!」

ここは世界一有名な配管工兄弟が住む国、キノコ王国。いきなりであるが、早速ピーチ姫がクツパによってさらわれたようだ。

「クツパめ、こりもせずにもまた悪事を始める気か！ 姫、今助けに参ります！」

こうしてマリオはいつものように囚われのピーチ姫を助けるため、クツパ城へ乗り込むべく旅に出たのであった。これはスーパーヒーローマリオがクツパを倒してピーチ姫を救い出す物語——ではない。



世界最大の軍事力を誇る悪の帝国、クツパ帝国。マグマ煮えたぎる灼熱の大地に、大魔王クツパの住むその城はあった。そして、そんな悪の帝国に不釣り合いな高貴さを纏った美しい女性が一人。クツパによってさらわれこの城に連れてこられたキノコ王国国主、ピーチ姫である。

「……ねえクツパさま？ 私はね、別にあなたが私を浚うこと自体は別にいいと思ってるのよ」

「う、うむ」

「私を浚う理由が私の魔力を恐れたからでも、嫁にしたいからでも、特に理由もなくなるとなくでもいいの。結局浚われるんだし何でもいいわ」

いきなり爆弾発言をする姫。彼女は自分がさらわれることに拒否感はないらしい。

「でもクツパさま。これはどういうことなのかしら？」

「と、いうと?..」

「私と、私のいるこの部屋を見て何かお感じになりませんか？」

そう問われたクツパはピーチ姫と、彼女を捕らえておくための監禁部屋を眺めて、ふと呟いた。

「姫を閉じ込めておくには部屋の内装が貧相だな」

「それよ、それ!!」

クツパの言う通り、監禁部屋の内装はだいぶショボかった。電気は裸電球だし、ベッドは安アパートにありそうなベッド、床はベニヤ板である。そもそも監禁部屋なんだからそんなもんでもベッドがあるだけマシな方と思わなくもないが。

「あのね、私は姫よ？ 王族でありキノコ王国の国主を務める尊き身であるのよ?」

「う、うむ」

「その高貴な私を浚って！ 閉じ込めておく部屋が！ なんでこんなボロ部屋なのかしら!?!」

要はピーチ姫は自分の監禁部屋が貧相すぎるのが気に食わないらしい。人質の割にやたらと余裕がある御仁である。

「こんな部屋でマリオが助けに来るまで生活するなんて断固お断りよ！ 環境改善を要求する！」

「ピーチちゃん、自分が人質なのわかっておるか？」

「うっさい！ 大体、前はこんな部屋じゃなかったでしょう!?! もつと豪華で居心地のいい部屋だったじゃない！」

どうやらピーチ姫が以前さらわれた際には彼女も満足いく水準の豪華な部屋が与えられていたらしい。それがいきなり安アパートレベルに落ちればそりゃ不満も抱こうというものだ。それが人質の態度かということは置いておく。

「いや、ワガハイもピーチちゃんには良い部屋を与えたいのだが、実は事情があつてな」

「事情?」

「実は前回の戦いでマリオに城を完全に破壊されてしまって新築にしたのだが……それで予算をほとんど使いきってしまったこの部屋はあまりの予算で突貫工事で作ったのだ」

「なん……ですって……」

どうやらピーチ姫の監禁部屋が粗悪になったのはマリオのせいだったようである。

「あのヒゲー！ 余計なことしてくれたわね！ 大体いつもいつもクリア率がどうだとか煩いし助けが遅いのよー！」

「仮にも自分を救い出してくれる相手に辛辣すぎではないか？」

「やかましいー！」

知らないところで愛しの姫にヒゲ呼ばわりされるマリオ。かわいそうな男である。

「どうかクツパさま、あなた私のこと好きなのでしよう!? なら私の部屋ができるまでさらわれないとかそういうデリカシーを發揮すべきでしょそこはー！」

「だってピーチちゃんに早く会いたかったし」

「そりやどうも！」

もはやカップルの痴話喧嘩か何かしか見えないが、結局ピーチ姫の抗議も虚しく環境改善はなされずに終わった。そもそも改善するための資金がクツパになかった。

「はあ……仕方ないわ。どうせやることもないんだし寝て過ごしましょう」

そう言つてベッドに潜つたピーチ姫であるが……寝つけないのか、ゴロゴロと何度も寝返りを打ち、起き上がつて一言。

「こんな固いベッドで寝れるかっ!!」

どうやら王族であるピーチ姫には安アパートのようなベッドは固すぎたようである。超一流のものしか使ったことがないのだから当たり前だが。

「やっぱり我慢できないわ！ クツパさまに資金が無いつていうんならいいわ！ 私が自分でこの城の物を集めて環境改善してやるんですからね！」

こうして、ピーチ姫は自身の環境改善のために自ら行動を開始した。

——これは、クツパ城に囚われたピーチ姫が、自身の満足いく環境を手に入れて安眠するための物語である。

安眠枕を確保せよ！

「ベッドは仕方ないとして、せめて枕はいいものが欲しいわ！」

ピーチ姫の最終的な目標は自身の満足いく環境を整える事である。とりあえず最初は調達が楽そうな枕からアップグレードしていく事にした。

「まあ、まずは外に出ましょう」

何をするにもまずは外に出ないと話にならない。というわけで部屋を出ようとするピーチ姫であったが。

「あら？ 開きませんわね」

当然である。そもそもピーチ姫はこの部屋に監禁されているのだから、自由に出歩けるようになっていくわけがない。その後もしばらくガチャガチャとやっていたが、開く気配のない扉。それに対してピーチ姫が下した結論は。

「仕方ないわ。壊しましょう」

力技での強行突破であった。ずいぶん荒っぽいお姫様である。

「よーし……」

思い立ったらすぐ行動。ピーチ姫はその場で腕を振って準備運動すると、おもむろに扉に背を向け。

「ハッ——」

かけ声を上げてお尻から扉に向けて突撃し、

「——チャア!!」

扉に触れた瞬間、轟音と共に爆発を引き起こした。一体どういうお尻をしているのだろうかこのお姫様は。無論、扉は粉々であった。

「おーっほほほ、たかが扉の分際で私の行く道を阻もうとするからよ！」

お姫様というより悪役令嬢のような高笑いを決めてご満悦なピーチ姫であったが——ここで思わぬ事態が発生する。

「……あら？」

ガラガラと響く音にピーチ姫が頭上に目を向けると、天井の一部が爆発の衝撃に耐えられずに崩れて来ていた。

「まずっ!？」

慌てて走り出そうとするピーチ姫だったが、それよりも先に一際大きな破片が彼女の真上に降り注ぎ――

「ぶべらっ!？」

――女性が上げてはいけない悲鳴を上げ、哀れピーチ姫は破片の下敷きとなり圧死。物語は最悪のバッドエンドを迎えるのだった……。

「うー、酷い目にあっただわ」

――とはならず、あっさり復活して起き上がるピーチ姫。

「おかげで残機がひとつ減ってしまったわ。なんてことかしら」

そう、この世界は残機制。文字通り命にストックがある世界である。しかも増える。加えて、所持コインを残機に変換する技術もあり、キノコ王国の国主であるピーチ姫はほぼ無限の残機を持っているに等しい。まあ、一回死ぬ度にキノコ王国の国家予算が1000コインほど失われていくのだが、姫の命と比べれば取るに足らないことであろう。

「ともあれ、扉は開いたのだし行きましょう」

壊したのを開いたと言っただけかとはともかく、ひとまず自由となったピーチ姫は部屋の外へと繰り出すのだった。

「あら、結構間取りが変わっているわね」

通路を歩きながらそう呟くピーチ姫。何度もさらわれている彼女はクッパ城の間取りはトイレの位置まで把握していたのだが、マリオに壊されて新築したことで間取りも変わってしまったようである。

「あらっ？」

ピーチ姫が前を見ると、ノコノコが前方から歩いて来ていた。監禁されているはずの姫が自由に歩いているのを目撃されたらまずいのでピーチ姫は隠れてやり過ぎ……

「ごきげんようノコノコさん」

「あ、これはピーチ姫。ご機嫌うるわしゅう」

……ことはせずに、道のと真ん中を堂々と歩き、微笑んでノコノコに挨拶した。あまりに当然のように挨拶されたため、ノコノコも気付かず挨拶してそのまま通り過ぎてしまった。もちろん、これはそれ

を狙ったの行動――

「スルーしてくれて良かったわ。隠れるなんて高貴な私らしくありませんし」

――ではなく、単に『なぜ高貴な自分がゴソゴソと行動しなければならぬのか』という高飛車な考えなだけであつた。作戦でもなんでもなく隠れるのが嫌なだけである。ともあれなんとかノコノコをやり過ぎしたピーチ姫がそのまま歩いていると。

「あら、あれは……ジユゲムさんかしら？」

その眩きの通り、前からやってきたのは雲に乗り、メガネをかけた亀。ジユゲムである。

「ごきげんよう、ジユゲムさん。いい日和ね」

「ああ姫さま。ご機嫌うるわしゅう……ってなんで出歩いてるんです？」

やはり堂々と挨拶したピーチ姫だったが、さすがにジユゲムは姫が出歩いている不自然さに気付いたようである。それに対して姫の返答は。

「まあまあ、いいじゃありませんのそんな細かいことは」

「は、はあ……」

適当に煙に巻いてうやむやにするごり押しであつた。随分とまあ凶太いお姫様である。

「それよりもジユゲムさん、ひとつお願いしていいかしら？」

「はあ。なんででしょうか」

「その雲、私に貸していただけませんか？」

どうやらピーチ姫はジユゲムの雲に目をつけたようであつた。乗れるのだから枕にもできるだろうという考えである。

「え、嫌です」

「どうしても？」

「はい。そもそも自分たちの雲は貸し借りするようなものじゃありませんので」

断固拒否するジユゲム。彼らのプライドからして譲れない部分なのであろう。意思が固いことを察したのか、ピーチ姫は溜め息を吐い

た。

「そうですか。仕方ありませんわね」

「すみません」

「いえいえ、無理強いはできませんわ」

「では私はこれで」

ピーチ姫はそのまま立ち去るジユゲムの背を見ながら――

「ふっー！」

「ぐふうっ!?!」

――王冠を手に持って無防備なジユゲムの後頭部を殴打した。そのまま昏倒し、ピクリとも動かないジユゲム。そしておもむろに王冠の血を拭い、ジユゲムの乗っていた雲を拾い上げるピーチ姫。誰がどう見ても強盗殺人の現場であった。

「やりましたわ。これで枕ゲツトですわね。ジユゲムさんには悪いことをしましたけどまあ残機のひとつぐらい諦めてもらいましょう」

『残機があるなら殺してもいいよね』理論を展開する姫様。どちらが魔王軍かわかったものではない。ともあれ、ジユゲムの尊い命がひとつ犠牲にはなったものの、目的の枕を手に入れたピーチ姫は機嫌良く監禁部屋へと戻るのだった。

「さて、新しい枕の使い心地は……」

監禁部屋に戻った姫はさつそくジユゲムの雲を枕にしてみることにした。なお、姫が破壊した扉や部屋の天井は既に元通りとなっていた。ゲーム画面を切り替えたら壊したはずの地形が元通りになっているアレである。

「思った通りだわ！ ふわふわで凄く気持ちいい！」

どうやらジユゲムの雲は彼女のお気に召したようでご満悦のピーチ姫。そのまま雲を枕にして横になると、すやすやと寝息を立て始めた。こうして、彼女は理想の枕を手に入れることができたのであった……。

「うぐえっ!?!」

と思いきや、いきなり強かに頭をベッドに打ち付けてしまい、あまり姫らしくない声を上げて目を覚ますピーチ姫。

「な、なんですの!?!」

何が起きたのか、辺りを見回すピーチ姫だったが、ふと気付く。

「あ、あら?・ 雲は?・ 雲はどこへいったの!?!」

そう、彼女が枕にしていたジユゲムの雲が無いのである。慌ててベッドから起き上がるピーチ姫だったが——ふとある事を思い出した。

「し、しまったあああ!・ あの雲はしばらくすると消えてしまうんだったわ!!」

そう。ジユゲムの雲は、本来の持ち主であるジユゲム以外が手に入っても、一定時間が経つと文字通り雲のように消えてしまうのだ。ピーチ姫はよく足場の無い場所で雲が消えてしまいマリオが奈落の底に落下していく光景を彼女は思い出した。

「せ、せっかく理想の枕が手に入ったと思つたのに……」

がっくりと俯くピーチ姫。今回の行動は完全に無駄骨であった。あとジユゲムも無駄死にである。

「このままでは終わりませんわ!・ 絶対に理想の環境を手に入れてやるんですからね!」

——高貴なる姫様の奮闘は続く。